

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第21号

空中回廊

この企画展は温故知新 [美術館50年の歩み] / 会員のひろば /
愛知県美術館企画展から [ゴッホ展—孤高の画家の原風景—]
/ 講座ダイジェスト / 友の会活動紹介 / 事務局だより



○この企画展は温故知新○

「美術館50年の歩み」展

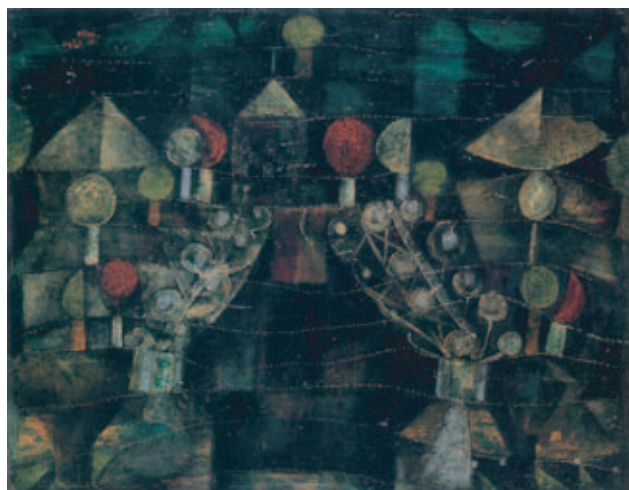
10月7日（金）から12月4日（日）まで開催

愛知県美術館＝50年？

今の愛知県美術館の姿しか知らないという方は、この展覧会名を聞いて意外に思われたかもしれません。まだまだ新しく綺麗な美術館なのに、そんなにも歴史があるのかと。確かに現在の施設に愛知県美術館が移ったのは、1992年と最近でした。しかしそれ以前には愛知県文化会館美術館としての時代があり、その開館は1955年。そう、ちょうど50年前です。もうおわかりですね。今回の展覧会では、愛知県美術館の文化会館時代と現在の形になってからの50年間の歴史を、コレクションを通じて追っていきます。ただし、単なる所蔵品展と侮ることなかれ。この展覧会は皆さんが今まで見たことのないコレクション展になること必至です。

美術館の歴史を追う

通常の展覧会とは異なり、今回の展覧会では各章が時代ごとに分類され、それぞれその時代に愛知県美術館に収蔵された作品が洋画、日本画、素描などに分かれて展示されます。その上、大きく前半と後半で文化会館時代と現施設の時代に分かれるため、新旧美術館の特色の違いが際立つ構成ともなります。つまり、各時代の収集方法の特色が体系的に体感で



パウル・クレー 《女の館》1921年 1994年度購入

きる展覧会となるようです。それに加えて、作品によってはどのような経路で愛知県美術館に辿り着いたかが呈示されます。人が紆余曲折を経て今その場所に存在しているように、作品にも様々な来歴とエピソードがあることを改めて感じさせる展覧会となりそうです。それでもまだ、どんな展覧会になるのか想像がつかないかもしれません。しかし、一つの美術館コレクション形成の通史を追う作業は、実は非常に重要な意味をもつのです。

変化するコレクションの性格

驚くことに、作品収集の理念はほんの数十年前と現在では全く異なります。そして、愛知県美術館に関してもそれは決して例外ではありません。愛知県美術館の前身である愛知県文化会館美術館は、当初、地域の人々の作品を発表する場として出発しました。つまり、現在の芸術文化センター 8 階のような、貸ギャラリーとしての性格しか持たず、開館後10数年の間は所蔵作品を展示していませんでした。ここにすでに、美術館に対する当時の意識の違いが表れていますね。それでも、コレクションは開館前の1952年から始まっており、徐々に増やしていったコレクションの総数は、寄贈作品を含めて文化会館時代で約2500点。ただしその内容は、重要な作品を何点も含みながらも、あくまで日本人作家が中心で、現在の私たちが愛知県美術館の所蔵作品と聞いてすぐに思い浮かべるようなものとは、姿をかなり異にしていました。むしろ現在よく知られているクリムトなどの近代西洋絵画が収集されるのは、現在の新美術館に向けて収集が行われるようになる1987年以降になります。現在では非常に一貫しているように見える美術館のコレクションも、最初から一つの明確な理念に沿って収集されたわけではないのです。作品収集に対する考え方は、その時代その時代の世相や価値観と複雑に絡み合っており、現



戸谷成雄《双影体Ⅱ》2001年 2004年度購入

代の我々には到底理解できないような動機もあります。今と異なる経緯で愛知県美術館に収まった作品を、現在の我々はどのように感じるのでしょうか。

美術館コレクションの大切さ

美術館において、一つの作品が収蔵されるまでの行程は、我々の想像以上に長く、細心の注意を払って行われます。何故ならその作品群が美術館の性格を露にってしまうからです。この美術館はどのような理念を持っていて、どのようなことを我々に学んでほしいのか、そしてその理念はコレクションという目に見える形できちんと実証されているのか。つまり、美術館の所蔵作品とは、美術館の総意の反映であり、美術館の善し悪しの判断材料にもなります。そのためにも、学芸員は思索に思索を重ねてコレクションを作り上げていきます。以上のように、美術館にとっては作品の展示と同様に、価値のある作品の収集・保存が一つの重要な役割でもあるのです。これは好景気時に作られた、施設はあってもコレクションを持たない、いわば「箱だけ」の美術館が次々と閉館に追い込まれていった事情とも関係している

でしょう。

美術館の問題点と未来に向けて

ただし、多くの価値ある所蔵品をもつ愛知県美術館においても、現状は決して易しくありません。好景気の折には潤沢であった作品購入資金も、現在では当時の4%程度。今はない収集業務専任の学芸員の存在からも、当時は作品の購入がいかにか頻繁にあったかを思い知らされます。今の資金不足状態では、理想的なコレクションを今後形成していくのは難しいといわざるを得ません。なかには木村定三コレクションなど、非常にありがたい寄贈の話もありますが、現代の美術館が抱える問題はまだまだ山積しているようです。これまで積み重ねてきた貴重なコレクションを振りかえり、今後の美術館の未来に生かすという点で、この展示会は非常に重要な展示会となるでしょう。皆さんも是非、愛知県美術館の歴史を目で見、肌で感じてみてください。

※今回は、本企画展担当の古田浩俊主任学芸員にお話を伺いました。

(湯田)

○会員のひろば○

他館交流鑑賞会 愛知県陶磁資料館 美術館サポート活動

◎他館交流鑑賞会（愛知県陶磁資料館）

7月2日、愛知県美術館友の会としては初の試みである他館交流鑑賞会が、瀬戸市の愛知県陶磁資料館で行われました。参加者は37名。中には案内役である陶磁資料館の仲野学芸部長に、親しげに話しかける方が何人かいました。会員には、同館のリピーターも多いようです。

はじめにレクチャールームで、同館が設立された趣旨や収集方針、それに陶磁器の歴史などを仲野さんにひととおり説明していただきました。その後「桃山陶の華麗な世界」展の展示室に移動。国宝 青磁鳳凰耳花入《萬聲》という中国宋代の龍泉窯で焼かれた名品から解説が始まり、重文曜変天目茶碗などの唐物名品の数々に続いて、桃山茶陶の重文 伊賀耳付水指《破袋》、そして最後の飛翔の部屋まで解説して下さったおかげで、より深く、心ゆくまで鑑賞でき大変好評でした。

◎美術館サポート活動報告（広報発送）

昨年夏の「国吉康雄展」から発送サポート活動を開始して、はや1年が過ぎました。展示会のポスター・案内等を封筒に入れる作業ですが、10種類以上の広報物を入れる場合もあり、集中力とおしゃべりと筋トレも兼ねる（時として腰掛けたままでは出来ない為）という、大変有意義なサポートとなっています。これらは友の会会員向けはもちろん、県下の学校やその他機関へも展示会の広報等として発送されます。



別館「ピカソの陶芸品」展は、母国でもこれほど多くは展示されたことがなく、見事なタッチの《女たちの頭部》の壺や他からヒントを得た皿などが並び、とても楽しいものでした。

愛知万博記念だからできたこれらの展示会は、質・量ともに大変見ごたえがあり、お薦めです。万博会期末の9月25日まで休館日なし午後6時まで延長開館し、期間中もお車での来館が可能です。皆さんぜひお出かけください。（平松・森）



写真は「ゴッホ展」の発送準備風景です。4名の初参加者を加え男性3名を含めた9名で、作業を進めながらも時間の許す限り談笑のひとつきを過ごしました。いつもより早く終わることができ、ホッと安堵しました。皆様のお手元に少しでも早く届くよういつも心がけています。

発送サポートは都合のついた時に参加できるので、他のサポートと兼ねておられる方も多ようです。皆さんも参加されてはいかがですか？

（広報発送担当理事 山根みさを）

○活動案内○

時期 企画展の2週間程度前に実施（10:30～16:00）。

日程を確認の上、ご都合の良い時間帯にご参加下さい。

場所 美術館学芸員室内 友の会コーナー

サポート活動に興味を持たれた方は、友の会事務局までご連絡ください。お待ちしております。

○愛知県美術館企画展から一深く知ると、もっと見えてくる○

ゴッホ展—孤高の画家の原風景—

9月25日（日）まで開催

ファン・ゴッホの名前が日本に紹介されてから、100年近く経ちます。日本でも数度の回顧展が開催され、多くの観覧者が作品に魅了されてきました。どうして我々日本人は、このようにファン・ゴッホに惹かれるのでしょうか。彼が歿した1890年以降、西欧諸国ではファン・ゴッホを当時の美術思潮の中で評価し、のちに人間的側面を論ずるといふ経緯をたどりましたが、日本では当初からその波瀾万丈

の生涯に関心が寄せられました。日本人のファン・ゴッホ観を決定的に形成した文芸雑誌『白樺』誌上に様々な形で展開された、狂気に陥った芸術家の究極の生き方が人生の指針として讃美され、文学界、美術界に熱狂的に受け入れられたからと思われまふ。ちなみに、1921年（大正10）3月「白樺美術館第一回展覧会」で、日本で初めてファン・ゴッホの作品は紹介されました。『白樺』の同人たちは、ファン・ゴッホやセザンヌの実物を日本で見たいという思いから寄付を募ります。しかし、1口1円の寄付金では資金が不足し、セザンヌ1点を旧肥後藩主細川護立侯爵に、またファン・ゴッホの《向日葵》（1945年芦屋で焼失）は、関西の実業家山本願弥太氏に購入してもらい（当時の価格で2万円）、展覧会は実現しました。当時の人々を熱くした、炎の人、魂の画家といったイメージが、今も人々の心に強く訴えるのかも知れません。

さて、今回の展覧会は、ファン・ゴッホの二大コレクションを有する、ファン・ゴッホ美術館、



フィンセント・ファン・ゴッホ
《芸術家としての自画像》1888年

クレラー＝ミュラー美術館の全面的な協力を無くしては実現しませんでした。両館の優れたファン・ゴッホの作品と併せて同時代の作品や資料などをご紹介し、当時の歴史的な時代状況を検証しながら、素顔のファン・ゴッホを浮かび上がらせようとするものです。ファン・ゴッホが宗教的な深い思索にあったオランダ時代には、当時の神学思想が彼の精神思考に大きな影響を与えました。具体的に、彼の宗教的思想の

源となった資料が展示されます。ファン・ゴッホが描いた織工などの労働者を画題にした作品にも、宗教家としての道を断念して画家に転身した彼が、彼らに神聖なものを見出そうとしていたことが表われています。また、パリに出たファン・ゴッホは、画家たちとの交流を通して新しい美術動向を吸収し、それまでの暗い色調を明るい色調へと変化させ、筆致も印象派風になりました。パリを去って過ごした南フランスや晩年の北フランスを描いた自然風景は、激しい筆致ながらも、私たちに崇高で静謐な感情を喚起させます。作品の中に宗教的な感情は生き続けたのです。画業を貫く彼の思想をたどることで、これまでは気づかなかったファン・ゴッホ像が見えてくることでしょうか。是非とも皆様の目で、ファン・ゴッホの実像に迫っていただきたいと思ひます。

（学芸員 藤島美菜）



○講座ダイジェスト○

「自然をめぐる千年の旅」展 記念連続講演会

二人の講師による、同じテーマでも異なった視点からのお話が聞けた今回の連続講演会の内容をご紹介します。それぞれのお話の後で、お二人のトークや質疑応答もあり楽しい企画でした。

第1回 「桜花をめぐるー美術と文学」



中西 進 京都市立芸術大学学長

西行の有名な和歌「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」を引用。この歌が詠まれた背景は日本の神話にまでさかのぼる。日本で花といえば桜を指し、古来、日本人がもっとも親しんできたのは桜の花であり、平安時代には花といえば梅であったというのは嘘である。桜はなぜ美しいのか？それは美の絶頂にその生命を終えるからである。衰えた醜さを見せないからである。なぜ桜なのか？それは山に咲く木だからである。桜とは本来、山桜のことである。「世界樹」という、生命の根元であり知恵の根元だとされているものが桜だと考えられていた。桜の落下には「紛う」があり、死にあやめとられてしまう危うさがある。花涅槃というものには、花見、祝祭（ハレ）、日常（ケ）、めぐる季節（確実に繰り返される秩序）、神仙の世界の5つがある。川合玉堂の《行く春》には花涅槃のうちの日常が描かれている。

辻 惟雄 東京大学名誉教授

「かざし」は髪挿すから飾りという言葉に変わった。

日本人の美意識のなかで飾り＝装飾というものが大きな意味を持っている。特に花の役割は大きい。浄土には四季がなく、かつて藤原道長が造った「浄土庭園」では人造の蓮に宝石の樹木が植えられていた。移り変わる四季や自然の風景に似せてはいなかった。日本の絵画ではどの時代のどのような作品（宗教絵画など）でも桜花と紅葉の対比が多く見られるのは、紅葉した葉と花の区別がないからでもある。15世紀頃になると調度品として四季を描いた屏風が残っている。桃山時代では金箔地障壁画に草花の中心に樹木を描いたものが出てくる。この樹木は「生命樹」であり、戦乱の時代に生きた武士の生命に対する願望が反映されている。江戸時代では宗達、光琳などの琳派の装飾性が強調される。探幽や応挙の写生画には中国の本草学の影響が見られ、花鳥画は平安時代に中国から伝わり、次第に大和絵化して江戸時代に洗練され幻想的なものになっていった。

第2回 「美術の中の自然」



千足 伸行 成城大学教授

西洋美術における自然の扱いについて。古代ギリシャでは、神が最後に造った人間こそが最も美しいとされていた。キリスト教が大きな影響力を持っていたルネサンスまでは自然を美の対象として捉えていなかったが、15世紀頃から自然が風景画に登場した。16世紀フランドルの風景画では実在する自然と理想化された自然の二分化が見られるようにな

る。17世紀にはロランやプッサンなど優れた風景画を描く画家が登場する。18世紀から19世紀にかけてのロマン主義の画家フリードリヒは自然の中に宗教を託すような作品を描いた。風景画の中で地平線の位置は空の重要性を示す役割をしている。オランダ絵画では地平線が低く空が大きく描かれている。西洋の風景画はその中に意味を見出そうとしている。

小林 忠 学習院大学教授

日本美術における自然の扱いについて。和歌で四季が詠まれ、俳句が季語を持っていることなどに日本人の感性がよく表れており、美術における自然表現も季節感が豊かなものになっている。景物という季節を表す絵柄（雪月花・花鳥風月）では太陰暦の影響から月を重要視している。陰陽、四季、12ヶ月を1枚の中に描くということは、世界の全てを描くことであり、仮の浄土を表現している。古い時代の美術品は宗教的なもの、工芸品以外で残っているものは少ない。武具（鎧・鞍）としての美術工芸品は多く残されている。江戸時代になると、琳派や文人画という流れがある。琳派の酒井抱一は俳人でもあり、自然の風情を芸術に取り入れた。池大雅は千里の道を旅し、万卷の書を読み優れた文人画を描いた。浮世絵にはその時代の風俗や四季の風情が表現されている。江戸以前の風景画は真景図や名所絵と呼ばれ山水画にあたるが、江戸以後「風景」と言う言葉が使われるようになった。近代に取り入れられた遠近法は日本人の触覚（実際に感じる風景）とはなじみにくいものである。

第3回 「風景の成立をめぐる」

山梨 絵美子 東京文化財研究所情報調整室長

日本の風景画においては、文学の中で出てくる歌枕を名所絵に描いていた頃は「何を描くか」であったが、近代になって個人的な自己表現として「どのように描くか」に変化していった。「どのように描くか」ということは需要と供給の関係があり、西洋絵画のように本物そっくりに描くことが求められ、西洋的遠近法や陰影の技術が受容された。明治10

年代以前の遠近法では近景ははっきり、中景はぼんやりあいまいに、遠景ははっきりという描き方がされた。明治10年代後半には小山正太郎や高橋由一らが線遠近法による市街図「道路山水」を盛んに描いた。しかし20年代に入ると、浅井忠の《春畝》のように、線遠近法によらず近・中・遠景を並行に積み重ねる空間表現へと移行していった。他方で明治26年に黒田清輝が印象派風の光と空気による表現をもたらし、また地理学者の志賀重昂は日本の風景を特徴づける要素として水蒸気を重視し、線遠近法からさらに離れることとなった。黒田の「構想画」では人物群像の背景としての風景が平面的に表されている。



北澤 憲昭 跡見学園女子大学教授

山水と風景の違いはなにか？山水は東アジアの漢字圏特有のものである。イメージが豊かで具体的な場所性がある。想像が身体に分け入るものである。三遠法の高遠（低いところから見上げる）は仰感を、深遠（同じ高さから見る）は見渡す感じを、平遠（高いところから見る）には見下ろす感じがある。山水画は三遠法を使い分け組み合わせて描かれている。横の視野の移動には四季の変化を感じさせる。風景はlandscapeの翻訳であり、西洋由来のものである。漠然とした空間の意識が感じられる。視野の移動には身体的経験運動を起こす。「風景」の「風」は心を動かす味わい深さ、「景」は光と影の境界である。軸物は下から見上げることによって奥行きと時間の移動が感じられる。横の視野の移動には四季の変化を感じさせる。日本の風景画は山水の記憶を持った風景画である。



AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

事務局だより

このところの友の会事業は、会員の多くの参加で活発になっています。

6月25日に開催された総会で、宮崎会長は「入会して良かった」と思われる友の会作りをしていきたいと抱負を語られ、市川館長からは、50年前の戦後何も無い時に市民の要望で愛知県美術館ができたことはすごいことであり、その当時の熱い想いを美術館は目指していかなければならないと挨拶をされました。

17年度前半は展覧会を応援するため4月に狂言鑑賞会、6月には「バリ・ガムランの響き」、8月には毎週金曜日「夜のカフェテラス」と展覧会にリンクした催事を行いました。自分たちの会費で美術館を応援しながら楽しむのも友の会の特徴です。ご意見ご要望をお待ちしています。

お知らせ

○9月には三重県立美術館でランチ付鑑賞会を行います。それに先立ち、4月には三重県立美術館の友の会の方々がこちらに鑑賞にいらっしやいました。このように「横のつながり」が盛んになっていくといいです。

友の会活動紹介



◎バリ・ガムランの響き◎……………▶

美術館と共催で屋上で開催された音楽会には立ち見も出るほどで、異国の音色に癒された梅雨の合間のステキなひとときでした。



◎特別鑑賞会◎……………▶

「アジアの潜在力」展の鑑賞会では担当の市川館長からレクチャーを受けました。第4室には海に浮かぶ島をイメージして作品を並べたと伺いました。

◀……………◎狂言鑑賞会◎

名古屋を中心に活躍中の野村又三郎、小三郎さん親子による狂言で、演目は「大清水」。狂言についてのお話は、若い小三郎さんの狂言に対する情熱が感じられました。



◀……………◎総会◎

17年度総会が6月25日に開催されました。理事も増えそれぞれの役割を担って活動を展開し、これからも美術館を支援していくこととなりました。



平成17年度後半企画展のご案内

ゴッホ展 ー孤高の画家の原風景ー

7月26日(火) → 9月25日(日)

美術館50年の歩み

10月7日(金) → 12月4日(日)

生誕100年記念 吉原治良展

12月16日(金) → 2006年2月26日(日)

江戸絵画 ー小世界を楽しむー

2006年3月10日(金) → 5月7日(日)

編集後記

今号の表紙は、「美術館50年の歩み」展にちなんで旧美術館時代からの収蔵品、ブルーデルの彫刻になりました。旧美術館ロビーに展示され親しまれていたことで、懐かしんでくださる方もきっと多数おいでのことでしょう。ちなみに、「新美術館としてスタートした時にはじめて加わった所蔵作品」とか「現在いちばん新しい所蔵作品」にしようかとの案もありましたが、やはり「友の会」の基盤になっている美術館を愛する層の厚さと、情熱に敬意を表してこの作品になりました。

もっと愛知県美術館ファンが増え友の会の会員が増えて発展していきたいですね。今回から編集に加わってくださる方も増え、ますます元気になります。(中田)

□編集 水野 愛子/平松 章子/森 健次/伊奈 由希子/湯田 文折戸 祥子/中田 賢/三木 信吾/真野 良子(事務局)

□協力 愛知県美術館企画普及課

□発行 2005年8月

愛知県美術友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2

愛知芸術文化センター内

TEL: 052-971-5511 (代) 内線 347

FAX: 052-971-5604

E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

美術館 HP: <http://www-art.aac.pref.aichi.jp>